

Title	三、プレステド石器時代の文化(上)
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.173(671)- 188(686)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	海外史壇紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0173">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0173</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

de, 42, 43, 1927)。Dortmund に就いた L. von

17, 1924) である。

(一九三一年十一月)

Winterfeld の著述 (Geschichte der freien Rechts und Hansestadt Dortmund, 1934; Pfingsblätter der Hansischen Geschichtsvereins, 23, 1932; 16, 1925) がおほく用いられた。本論は實に數多く、特

に標題や序文などは B. Kuske のもの (Köln) と Ermentrude von Ranke のもの (Köln und das Rheinland. Ein Ausschnitt aus dem Wirtschaftsleben des 16. und 17. Jahrhundert-Hans-

Geschichtsbl., 1922; Kölhs binnendeutscher Verkehr im 16. und 17. Jahrhundert-ibid., 1924; Von Kaufmännischer Unmoral im 16. Jahrhundert-ibid., 1925; Das Hansische Köln und seine Handelsblüte-Hansische Volkshefte, 6, 1924; Die wirtschaftlichen Beziehungen Kölns zu Frankfurt-am-Main, Süddeutschland und Italien im 16. und 17. Jahrhundert-Vierteljahrsschrift für Soz.-und Wirtsch. Geschichte,

間崎万里譯

### III. ハンブルクの歴史文化 (4)

はじめに ハンブルク博士の生前に於ける最後の著述として

大文化史「古代」の改版を見たことは既に本誌(十四回の目)に詳述した所であるが、今又ヨルハーハウゼンとの合著 History of Civilization : Earlier Ages, 1937 を手に取らなければ出来ない。

後者は、一九一四年に初版を刊行した Outlines of European History, Part I. の幾度か改訂、改題されたもの。最後の形であつて、前者に於ける新研究が攝取せられた清新な「古代」中世史の教科書である。自分は小「古代文化史」の翻訳刊行の際、博士から追いついで新著による補訂を希望せられ、またのやうなが、近づくの兩著、主として後者に基づいて改訂版を出しつゝ、その責任の一部を果たせんとするところ、最近に於ける古代史の研究中進歩の最も著しかった史前文化の部分をより詳細なる大文化史(第一、二章)の翻譯を掲げて、舊譯の讀者並じに方面的研究に親しみ薄き人々の参考に供すると共に、併せて教科書記述の一様式を示すことを思ふ。

本書の記述は頗る簡単で且つ平易通俗的であるけれども、内

容はシカゴ大學東方研究所の調査の結果が全般的に（報告書なほ刊行中）攝取せられた最新研究を含み、ナイル河に於ける最古の打製石器の發見やサハラ沙漠に綠地時代のあつたことや、所謂イスの湖村が水中の杙上に建てられたものではなく、昔水なき湖岸にあつたことなどが記されてゐて、現在のところ、是以上の新研究はないのであるから、十分に玩味せられんことを。

## 第一章 食物採集者としての人類

### 一、人類最古の生活方法

一、ロビンソン・クルーソー漂流記の讀者は皆恐ろしい暴風のために濱邊に打ち上げられた彼がこの無人島で生活するのに必要な、居所、道具、家具、食物、被服、その他のものをやつと調達するに至つた經路に如何に興味を覺えられたかを想起されることだらう。彼は着てゐた被服の外、殆んどすべての持物を失なつた。食物もなかつた。

しかし後彼は巢に居る雛鳩や海岸で海龜を見附けることが出来た。又葡萄や柑類のライムやレモンを採集した。我等は彼がこの食物を『生産』した

のではなく、これを見當り次第『採集』したに過ぎないことに氣附くのである。それ故彼は最初は單なる『食物採集者』に過ぎなかつた。彼は仕事をする道具を持たず、危險な野獸に出遭つても當初は身を衛る武器を持たなかつた。

二、しかし後ち暴風が止んだとき波濤が靜まりクルーソーは岸から遠くないところに難破船を見附けてそれに泳ぎつき、木片を綱で縛つて筏を組むことが出來た。船を搜して道具や武器や、穀物の種子や鐵砲やその他役立ち得るものを見附けて筏に積んで島に運んだ。彼は道具を用ひて自分で家を建て着物を作ることが出來た。又穀物の種子を植えて澤山の食物を得た。かくして食物採集の必要がなくなり、彼は『食物生産者』となつた。

彼はこの島を所有することが出來、これが彼の小さな世界となつた。彼は食物やその他の必要品を生産したので、それ以來、かなり愉快な生活を送

ることが出来た。

三、クルーソーは船で見附けた品物があつたればこそかうすることも出来たのである。もし是等の品物が無かつたならばそれを作る何等かの方法を見出さねばならなかつただらう。この場合幸ひインキといふ様な若干の必需品があつたけれどもそれがなくなれば之を作らねばならなかつた。しかし、クルーソーは是等の品物について知つて居り、自分の國に居たとき之を使用したこともある。それ故記憶を辿つて疎雑な代用品を作ることが出来た。例へば犁を木から切りとつたのであるが、幾十萬年も以前に住んでゐた最古の人類はロビンソン・クルーソーよりか遙かに不利なる状態に置かれてあつた。我等は言はゞ人類の大きな島とも見るべきすつと昔の世界のことを考へて見なければならぬ。この島に辿りついた人々は難破船を訪れて筏を組む前のロビンソン・クルーソー

ほどの暮しもしてゐないであらう。彼に道具を供給した難破船が無かつたならば、彼が幼少の時から見て居り且つしばゞ自國で使用したことのある道具についての『知識』を有してゐないであらう。しかし太古の人類は道具や器具の有る國に決して住んだことがない。その様なものは世界の何處にも存しなかつたからである。太古の人類は斯様なものを見たり聞いたりしたことなく、その製作され得ることも知らなかつたので、最初は全くそれ等のものなしで過ごした。

四、誰も知る様に我等の祖父はその幼少時に飛行機を見たことも、或はラヂオを聞いたこともなかつた。それ等は發明されてゐなかつたからである。同様に太古の人類は如何なる種類の道具も決して見たことも聞いたこともなかつた。全世界に誰も斯様のものを考へて見たことも斯様なものがあり得ることを知つてゐたものもなかつたからで

ある。最初の人類はその必需品の供給に使用する手があるので、話すことも火を作ることも出来なかた。現在我等自身の生活をかくも安易に、便利に、興味あらしめてゐる幾多の事物について何も知られてゐなかつた。すべて斯様な事物は相次いで發明されねばならなかつた。斯様な發明は頗る徐々になされた。斯様な發明の最も簡単なもののが、人類の生活を漸次改善するまでに數萬年を経過したのである。極く僅少の改良しかなされなかつた頃の初代の人類の生活は所謂『未開』なのであつた。

五、しかし頗る長い時期を経過した後、人類は極めて重要な發見と發明をなし、その生活の様式は野蠻の域を脱し大に改善された。斯様な人類を我等は『文化人』<sup>シカイライズド</sup>と稱する。以上の發見と發明の目録はとても長くてこゝには擧げ切れない。唯だ最も重要なものののみを擧ぐれば、先づ最初に

『言語』が出來、次いで澤山の發明を伴つた。彼等がまだ『食物採集者』に過ぎなかつたとき、『火』を作り、食物の『採集』に必要な木製及び石製の『道具と武器』を作ることを覺えた。次いで彼等は二つの發見をして『食物採集者』から『食物生產者』へと移つた。その一つは『家畜の飼養』であつて、彼等が野生の牛羊を馴らしてこれを牧地又は厩に飼育することを知つたのである。第二は『農業』であつて、人が初めて野生の草の或るものを持附けて栽培することを知り、かくて是等が食物としての種子を供給し、栽培穀物即ち小麥や大麥の如き『穀物』となつたのである。この後は、文化の生活とその後の進歩のために人類に必要なのは『金属』の發見と『文字』の發明があればよいのであつた。

六、地上にはなほ多くの未開民族が存するけれども、太古の人類ほどの全く未開な民族は最早や

存在しないのである。しかも近代に於て探險家によつて發見された最下級の野蠻な部族はなほ我等の最古の祖先のそれと頗る似寄つた生活を行つてゐた。例へば約三百年前にオランダ人がタスマニヤ島で發見したタスマニヤ人は被服を着けず、未だ眞に屋根を葺いた小屋を建てるなどを知らず、風除の背後に踞つてゐた。彼等は又弓矢を作ることを知らず、魚扱の外漁することも知らなかつた。彼等は山羊、羊、牝牛を有せず、馬もなく、犬すらもなかつた。何等播種や收穫のことを聞いたことがなく、粘土が火で硬くなることを知らず、隨つて土器の壺や瓶や食用皿を有しなかつた。

七、裸體で家のないタスマニヤ人は人類欲求の極く僅かしか充たすことを知らなかつた。彼等はなほ石器時代の人であつた。それでも彼等が學び得たところのものは彼等を太古の人類よりかずつと遠方へ運搬したのである。彼等は日々使用し行ふ所の一切の慣行に對しての單語が有つて、簡単な言語を有してゐた。彼等は火を焚すことが出来た。火は寒天に彼等を温めた。彼等はその上に載せて肉を炙いた。彼等は頗る良好なる木製の槍を作ることを知つてゐたが金屬の槍先は附いてゐなかつた。それは金屬などゝいふものを聞いたことがなかつたからである。鋭い石片で尖らしたこの槍を極めて正確に投げて食用に供する鳥獸を打ち落し、或は敵人を驅逐することが出來た。彼等は砂岩の平たい石片を携へて來てその端を缺きとつて薄くし、疎製の刃物を作ることが出來た。これを用ひて彼等が殺した鳥獸の皮を剥ぎその肉を刻んだ。彼等は又樹皮の纖維を用ひてコップや容器や籠を編むことが頗る巧者であつた。

八、數十萬年の間、太古の人類はタスマニヤ人のそれよりか文化の遙かに劣つた生活を營んでゐた。この野蠻な生活は舊世界の廣汎なる地域に散

布し、また全地中海を取囲んでゐた。蠻人はその全海岸に住み、遠く内地に擴がつてゐた。北は北海に又大英諸島を横ぎり、南は遠くアフリカを横断して今日のサハラ沙漠に及び、東はペルシヤ湾の彼方に及んでゐた。文明が發生したのは地中海の『東端』を取囲んでゐる地域に於てであつた。それで我等は先づ東地中海世界に眼を向けねばならぬ。

九、當時のヨーロッパと北アフリカの地は今日とは頗る異つてゐた。高い森林がヨーロッパの河川を縁取りその茫茫たる平野を蔽うてゐたのみならず、當時雨多き綠地であつたサハラ沙漠の一部をも蔽うてゐた。巨大なる河馬が地中海の兩側の諸川の岸を轉輾し、長さ一メートルもある一個の角を頂いた獰猛な犀が夥だしく熱帶の密林中を驅進してゐた。五十五サンチもある毛の深い巨象が叢林中を彷徨してゐた。無數の野牛が高地に草食

し、夥多の鹿の群は森の中にかくされてゐた。殊にヨーロッパ側には野馬の大きな群が彷徨してゐた。イタリーとシシリイを通過し又ジブラルタルの處で、地中海に架してゐた陸橋はヨーロッパとアフリカを連結した。それ故に等の動物の多くは『陸により』アフリカからヨーロッパへ、又その逆コースを取つて往來することが出來た。空氣は濕潤、溫暖であつて、多くの熱帶の小鳥の音色を響かせてゐた。無數の生物(大小の魚、禽、獸類)を以て充たした熱帶性のこの曠野は地中海の周邊全部に擴がつてゐた。

一〇、裸體のまゝで何物をもつけぬこの地中海世界の蠻人は、彼等の日常の食物なる木の根や種子や野果を搜しつゝ、熱帶林の中を忍びやかに彷徨してゐた。彼等は狩人であつて、耳を澄して熱心に、粗末な木製の棍棒で打ち落し得る小なる鳥獸の音を聽いたのである。斯様な武器は頼りない

ものであつて、是等の蠻人はしばぐ、森の巨獸の落雷の様な足音を感じし或は叢林の深い列樹の間を通り行く巨象をぼんやり眺めて恐れて遁げた。狩人達は夜は木製のナイフでその獲物の肉を切り生のまゝ食べた後、何處へでも狩獵の導くまゝに眠り、猛獸を防ぐために火を作ることを知らず、サーべルの様な歯牙を持つた大きな虎の咆吼を聞いて、暗中に戰慄し乍ら伏してゐた。

一一、しかし遂に彼等は恐らく電光が森の樹を焚したとき、火についての知識を得たであらう。彼等はまた地中海邊のエトナやヴェスヴィオなどの如き恐ろしい活火山を見て、火を恐れることを知つたに相違ない。彼等が到頭回轉棒を用ひて自から火の作り方を知つたとき、之は前方へ大なる一步を踏み出したのであつた。そこで彼等はこの火で食物を煮焼し、身體を温め、木製の尖つた槍先を硬くすることが出来た。しかし彼等の木製

の鈍いナイフは硬くすることが出来なかつた。それで恐らく彼等は骨製のナイフを作ることを覺えたことであらう。數十萬年前に、彼等がその用途に應するやう石を『加工する』ことを覺え、かくして疎製の道具或は武器を生産することを覺えたとき、彼等は今日我等の所謂石器時代に這入つたのである。

一二、是等の蠻人が當時作り始めた石製の武器と道具は骨質や木質のものの様に腐滅することがない。太古の人類が食物を得んがための、又敵者たる猛獸からその身を衛らんがための、長い鬪争に生存をつゞけるために使用した石製の道具と器具の實物を、我等は今日手にすることが出来る。是等太古の人類は往々にして是等の石の道具と武器を喪失したからである。後に至り、是等の器具はその所有者が死んだとき往々之と一緒に埋めら

れた。數萬年の中に斯様に加工した石の數が非常に多くなり、その頗る多數のものが見出されたので、我等は是等の野蠻な狩人が後に殘して行つた足跡路の様なものをそれ等のもので形造り得るほどである。石器で出來たこの長い足跡路により是等太古の人類の痕を追ひ、どれだけ彼等が生活方法の改善へ向つて進んでゐたかを知り得る。この進歩は石器製作上の技術の進歩と彼等が徐々に習得したる他の産業上の改善によつて示される。現存せる彼等の手工の標本により、連續した三階段を區別することが出来る。即ち舊石器時代、中石器時代及び新石器時代がこれである。以下順次是等三時期の間に於ける人類の進歩を觀察しよう。

## 二、舊石器時代

一三、人工になる石器石武器は英語で artifact (加工品) といふ。これは『技工により作られた』(made by art) ことを意味し、『人工的』(artificial)

なる語と關係のあるラテン語系の言葉である。石加工品の地面に存し、或は犁鋤に掘り返されたのが、數百年前我等の祖先に注目された。爾來約一百年間、科學者は特に組織的發掘 (excavation) により、注意深く之を探求しつゝあつた。人類の初期の作品<sup>ウワーグ</sup>を研究することを考古學といふ。それで斯様な發掘は考古學的發掘と稱し、この業に携はる人を考古學者と稱する。石加工品の探求はヨーロッパ、特にフランスに始まつた。同處にはヨーロッパの舊石器時代の狩人の疎製の石器や石武器と彼等の屠つた巨獸の骨とが折々、是等の先史時代にフランスの諸川が、その深い近代的河床が河流で切り開かれる以前に、曾て流れてゐたところの流域傾斜面上、ずつと上方の砂礫の中に相並んで存在してゐた。是等がフランスで多數に見出されたので、その地に大博物館の石器蒐集館が設置せられたほどである。後ち同種の石器が他のヨー

ヨーロッパ諸國でも澤山に發見せられた。北アフリカに於ける最近の研究は同様にアルジェリヤからナイル河下流に亘る地域に石加工品を現出した。これは又地中海東沿岸のアジヤについても同じである。かくて我等は地中海周邊の全地域から出た數萬の石器石武器を研究することが出来る。是等のものは、舊石器時代の狩人が石を缺きることを發見してから後、人類の最古の進歩の魅惑的な物語を我等に展示するのである。

一四、是等の野蠻な狩人はその危險な生活が進むにつれ恐らく多數死亡したのであらうが、彼等は數萬年の間全地中海の周邊に不明の生存闘争を續けてゐた。彼等は遂に普通『石斧』(古代文化史譯書、改訂版第一圖参照)と稱する最も有益な石器を作し、徐々にこれに改良を加へて行つた。この石斧は最も廣く使用せられた人類最古の發明品であつて、今日殘存してゐる。舊石器時代の人類は、

恐らくその上に木器を製作することを習得してゐたであらうが、それ等はもちろん腐つて亡くなつたので、それについては何も知られてゐない。是等の勇敢な狩人は單獨にすべての動物と戰つた。そこには彼等の敵でない動物はゐなかつた。そこにはいまだ彼等が親切の手を差し伸ばすべき犬も羊も鶏もゐなかつた。近代の犬の先祖は當時不意に狩人に飛かゝつた獰猛な森の狼であつた。馬の様な、近代の家畜の先祖であつた獸類は、なほ野蠻の状態で森の中を徘徊してゐた。

一五、次いで非常な變化が、ヨーロッパ及び西アジヤに於ける舊石器時代のは等の狩人の生活を裏つた。彼等はその住居へる森の空氣が熱帶的溫度を失ひつゝあるのに氣附き始めた。地質學者はいまだにその理由を發見しないが、氣候は寒冷となり、時代の経過するにつれ、それまでなほ全年中北極地方及びアルプスの山頂に冠さつてゐた氷

が下降し始めた。この氷の下降は極地の氷の冠が大きくなり、北極の四面に南進したことを意味する。それは歐亞、北米へと推進したのである。ヨーロッパではどんぐり南へ匐行をつづけ、遂に氷が遠くテムズ河までイングランドを蔽ひ、歐大陸ではドイツの大半を蔽うた。アジャでは遠くシリヤを横ぎり、又アルメニヤの山地からチグリス・エウフラテスの上流に下つた。氷が後ち文明の發生した地域に影響を與へたのはこの地のみであつた。北アメリカの大陸では氷の南端は氷によつて運搬せられその地に残して行つた氷堆石の線によつて區劃せられてゐる。氷堆石 (moraine) の斯様な線は、例へば、南は遠くロンジ島に、西はオハイオ河とミズーリ河に沿うて發見せられる。

一六、ヨーロッパ、及び西アジアの北部に於て狩人は雪の冠を戴いた藍色の煌々たる氷河の大塊が彼等の居住せる林野の綠地を推進し、多くの庇

護された谷間や愛好の狩獵地の莫大なる樹木を壓し潰しつゝあるのを見受けたのである。彼等が長らく狩り立てゝゐた夥多の動物はより暖かい南方に退却した。かくて狩人は徐々に寒冷なる氣候に習熟することを強ひられた。氷は幾千年も殘留した。次いで徐々に融解して再び北方へ退却した。我等の氷河期と稱する數千年の時期の間氣候の變化するにつれ數回この氷の前進後退の運動が反覆せられた。氷が最後に下降して來たとき舊石器時代が終を告げてゐた。この時期に於ける石製の器具と道具の改良は頗る遲々たるものであつた。それ等數千年の全時期を通じて、殆んど進歩を見なかつたのである。

一七、氷の侵寇がかくして地中海の北側に於ける舊石器時代の人類にとりその生活を頗る困難ならしめてゐた間に、地圖を吟味して吾人は氷は決して地中海に達しなかつたこと、今日サハラ高原

と稱する地域なる北アフリカの南方平地全部は決して氷に見舞はれなかつたことを知るのである。

地中海の『北』側に氷結せる形態で氷河を建設してゐた同じ濕潤なる空氣はその『南』側に多量の雨を落させしめた。それ故サハラ高原はよく濕ほひ、

牧地、森林、叢林を以て蔽はれてゐた。この肥沃なる地域を横ぎつて舊石器時代の狩人は、地中海の北側に於て彼等が狩獵してゐたと同じ大きな鳥獸を追跡したのである。往々彼等は鳥獸を逐つて、ナイル河が既にサハラの東端に切り込んでゐた廣く深い峡谷へ這入り込んだのである。

一八、その頃のナイル河は今日よりも遙かに大ききな河であつた。ナイル河はミズーリ河と同じく折々その河床を移動し、その後決して元の河床に復することがなかつた。より大きかつた舊ナイル河の現在乾燥せる河床の一つで、現在のナイル河に平行して長さ五十哩を超ゆる一地帶が近年發見

せられた。考古學者達は深さ六十呎あるその砂礫層を發掘して、南方平地に於ける太古の狩人の石武器の多數を發見した。是等の武器は彼等が少なくとも數十萬年前にこの河岸で狩獵してゐた頃に失つたものに相違ないのである。

一九、氷河期中葉前の或る時期、即ち北アフリカの狩人がなほ舊石器時代にありたる頃、既に久しく北アフリカを濕ほしてゐた多量の雨が徐々になくなり始めた。降雨が漸減するに至つた理由はいまだ明瞭にされてゐない。ヨーロッパの降雨も亦た減少した。濕度喪失の結果としてヨーロッパに於ける氷河氷は減退し北方に退却し始めたと共に、北アフリカに於ける降雨の減少はサハラ高原をして徐々に乾燥せしめた。その枯死せる植物は漸次消滅した。數萬年の一時期の間に、サハラ高原は徐々に變じて、今日見る如き水なき沙漠となつた。かくして地中海の北側の狩人がなほ寒氣と

氷に苦しみつゝあつた間に、その南側の狩人は水分の缺乏のためにその郷土たる高原から徐々に驅逐せられつゝあつた。

二〇、この期に於けるナイル河流域は南方平地に於ける太古の狩人達にとり最大の價值あるものであつた。この流域は高さ數百呎乃至一千呎に及ぶ峻しい岩壁に挾まれた幅三十哩を超ゆる谷間即ち峡谷である。この峡谷を流下してゐるこの大河

の流域は舊石器時代の狩人に水多き新郷土を提供

した。それ故彼等はその住居を移してナイルの峡谷に降り、河岸に沿うてその家庭を作つたのである。この大ナイル濠の底地は、沙漠と同じく降雨なき地であるけれども、沙漠のすつと南方の降雨地域から多量の水を得てゐるナイル河により濕ほされてゐる。兩岸を事實上降雨なき沙漠に保護せられ、地中海の北側の寒氣或は氷に見舞はれるこのないこの大流域は『庇護された』家郷をなし

### 三、中石器時代

二一、斯くてヨーロッパが氷雪と鬪争しつゝあつた間に、北アフリカの狩人は大ナイル濠の底地に溫暖快適なる隠れ家を見出したのである。それでも氷が最後に第四回目に襲來したとき舊石器時代のヨーロッパの狩人は遂にその石製器具と生活様式を改善した。そこで所謂中石器時代なる新時期が開始された。自分で防寒の庇護所を造り得なかつたヨーロッパの狩人は、石灰質の洞窟に逃げ

込んで、數千年間生存をつゞけたのである。我等は斯様な狩人がその洞窟の入口で燧石具の端を綿密に缺きとりつゝある有様を想像し得る。遂に彼はこの時までに、疎製の舊石器をすつと後ろに残したのである。彼は堅い骨片で『壓力<sup>プレシュア</sup>を加へて』その燧石具の端に沿うて見事な打裂の線を缺きとることが出来、かくて、その祖先がやつてゐた如き『打撃によつて』缺きとつたものよりも、遙かに精緻なる切り口を作ることが出来た（この新燧石器製他の民族の侵入により將來さ<sup>れたものであるかも知れない</sup>）。この發見はかなり種々なる燧石器、即ち石鑿、石錐、石槌、研磨器、削器を作らしめた。この新に加壓された端はものを切り且つ骨、象牙、殊に馴鹿の角をも加工し得るほど銳利になつた。巨象<sup>マシモス</sup>は狩人に象牙を供給した。

彼等が角を必要とするときには馴鹿の大群が氷によつて南に逐はれ、狩人の住んでゐる洞窟の前方で草食しつゝあるのを見附けた。

二二、中石器時代の狩人はその銳利なる新石器によつて鉤のある象牙の槍先を作り、これに長い木の柄をつけ、各自その帶に銳利な燧石の劔を帶びた。彼等は木製の槍の柄を矯め直すために馴鹿製の氣の利いた槍の柄矯正棒を發明した。角又は象牙製の他の聰明な工夫は槍投器であつて、狩人はこれを用ひてその長槍を以前よりも勢よく一層遠くへ投げることが出来た。發掘された見事な象牙製の針によつて、この民族が獸皮を縫合せて作つた被服により寒氣や林野の荆棘を防ぐことを知つてゐたことが分る。

二三、斯様に裝はれた中石器時代の狩人は舊石器時代の人々よりも野獸にとり遙かに危険な敵であつた。考古學者はシシリイ島の一洞窟から二千餘個の河馬の骨を掘り出した。これは中石器時代の狩人が殺したものであつた。フランスでは斯様な人々の一集團が多數の野馬を殺して食用とし、

その骨を陣屋の火の周りに投げ出したのが集積し遂に或る箇所では厚さ六呎ばかりの層をなし、何れも五十呎に二百呎の面積を占めた。發掘者は斯様な堆積物の間から骨笛をすらも發見した。家へ歸つて來る狩人は、これを吹いて洞窟内で待ち詫びてゐる飢えた家族に、その歸りを報ずることが出來た。歸り着いた彼はその家が屑物の山で取り囲まれてゐるのを見出した。腐肉の惡臭を放てる中に、この野蠻なヨーロッパ人は夜分その穴居に匍ひ込み、その眠つてゐる洞窟の床下數呎のところには、幾千年もの集積物なる彼の祖先の遺物が層又層をなしてゐることを夢にも知らなかつたのである。

二四、無智野蠻な日常生活を行つてゐたにも拘らず、是等原始の狩人は正に人の心に入込んだ最初の大光輝の黎明に立つてゐたのであつた。是等野蠻な狩人は各自夜分その洞窟に臥するや眼を閉

ざして、終日彼が追及しつゝあつた巨獸の心像を思ひ浮べることが出來た。彼は動物を想起せしめる様な格好の奇妙な木を想起することが出來、又寝返りして洞窟内に馬の様に見える隆起せる岩石の塊を見たでもあらう。かくして彼の胸中には、動物とその様に見える木や、馬と馬の様に見える丸い岩などの『類似』の觀念が生じたことであらう。この考が繼續すると類似したものが自分の手で作れることを氣附き始めた。別言すれば似寄りの物を作つて一つの物體を模することが出來た。かくして彼の胸中に『模倣』の可能性が生ずる。その瞬間に藝術が生れ、人の心が新たな世界に、生涯に曾つてなかつた光輝に充ちた美の世界に這入つたのである。幾星霜の間彼の『肉體』は發達しつゝあつたが、彼の記憶の倉庫から美しい形體を創造し得るこの新たな實感の中に彼の『精神』は成長して、より高い新たな水準に向上了ないのであ

る。描き方を知つたばかりの初年生が小さな石の上に作つたスケッチが發見せられた。この寫生は近代の畫室の練習のやうであり、より巧者な師匠によつての訂正が今なほ示されてゐる。

## 二五、人類の先史時代の生活の中、この新『創造』期はヨーロッパの石器時代の洞窟内で發見せられた驚くべき系列の藝術品によつて窺はれる。

ヨーロッパの是等中石器時代の狩人が既に餘程巧者に彫刻し、描寫し、且つ彩色することの出來たのを見て我等は少なからず驚かされる。スペインの一貴族が北スペインにあるその領地内の洞窟に匍ひ込んで、燧石器や骨器の見出される洞窟床面の堆積物を掘り出してゐた。そのとき幽暗い洞窟内に遊んでゐた彼の少娘が、突然『牛だ』『牛だ』(Toros ! Toros !)と叫んで、同時に天井を指さしてゐた。驚かされた父親は天井を見上ると、決して忘れることの出来ない光景を見、即座に燧石掘

りを中止した。岩壁上に保存のよい色彩で畫かれた野牛の行列が洞窟の天井に遠く連つてゐた。一少女の眼が之を發見するまで、少なくとも一萬年の間、何人の眼もこの消滅せる人種のかいた洞窟畫を見たことがなかつたのである。

二六、是等原始人の間に於ける高度生活の他の遺物は洵に乏しいのであるが、それでも中石器時代の古い人々ですら神を信じてゐた。彼等は既に死後人の魂の、即ち死者の生活について疎野なる考を有してゐたのである。仲間の一人が死んだとき、彼等はこれに習慣的の裝飾を施こし、少なくとも若干の燧石具を供へ、次いでこの死せる狩人をば、幾度となくその家族と狩獵の獲物を分有したことのある洞窟内の竈の下に埋め、環状に石を繞らすのである。この場處で、今日是等原始人の死體が幾世代となく、その上に集積したる塵埃の連續せる層の下に横はつてゐるのを發見するので

ある。

二七、中石器時代に於けるヨーロッパの狩人は彫刻及び繪畫に大に熟達したので、フランス及び北スペインの洞窟を彼等の狩する野獸の畫を以て充たした。同じ様な畫が東スペインに澤山あつて洞窟内のみなならず露天の岩壁にも描かれてゐる。

北アフリカでも同じであつて、こゝではアルジェリヤから全サハラを横ぎり東して上ナイル河に至るまで見出される。是等の廣汎な洞窟畫並に岩壁畫は、他の多くの證據と共に、我等に地中海の兩側に於ける中石器時代の狩人を示すのである。以下我等はナイル河に於ける彼等の一層有利なる狀

態と彼等がヨーロッパの氷河期の嚴寒から解放せられたことが、エジプトの狩人をして食物生産者たるに至らしめ、かくて久しく從前通り食物採集者に過ぎなかつた他處の競争者よりも、遙かに彼等を前進せしめた次第を述ぶべきであるが、しかし狩獵の生活は久しく繼續した。それは高き壁面を有するナイル河の峽谷が獵鳥獸の廣大なる保存地となり、後述ぶるが如く、サハラ高原の動物が頗る多くこの地に逃げ込んだことが今日明瞭になつたからである。野生の獵鳥獸の斯様な大群の出現は、中石器時代の狩人の生活を遙かに安易ならしめたに相違ないのである。